［調査・実践報告］

学部生ボランティアによる日本語チューター活動の試み

――学生団体と教員との連携を通して――

田口香奈恵

1．はじめに

東海大学の留学生数は，2011年10月１日現在，585人で，その内訳は，別科日本語研修課程生・日本語教育特別講座生（以下，別科生）108人，学部生362人，大学院生89人，研究生等26人である。外国人留学生が充実した留学生活を過ごせるよう学習や生活を支援するシステムの一つに，国立大学を中心とした多くの大学で採用されているチューター制度がある。東海大学でもチューター制度を採用している。学部２年次までの留学生に対し，個別に課外指導・援助を行い，学習の向上を図ることを目的とし，原則として大学院研究科長の推薦を受けた日本人大学院生がチューターに配置されている。支援は１対１で行われ，チューターには謝金が支給される。2012年度のペアは，春学期が33組，秋学期が５組だった[1)]。

しかし，本学のチューター制度の支援対象者は学部留学生で２年次までと限られており，学期開始時の募集期間を逃すと申込ができない。留学生総数の約２割を占める別科生に対する支援は，授業時や昼食時の交流，留学生の個人的活動（サークルなどへの参加）以外，皆無に等しい。別科生からは，「日本人と友達になる機会があまりない」，日本人学生に対して「会話の相手になってほしい」という声が聞こえていた。また，日本人学部生からも授業時以外で留学生と継続的に交流する場が欲しいという要望が以前からあった。そこで，支援対象者の範囲を広げ別科生を中心としたボランティア・チューター制度を新たに導入することで，日本人との継続的な交流の場が提供でき，これらの問題が解決できるのではないかと考えた。また，今回のボランティア・チューター制度は，Tokai International Communication Club（以下，TICC）という学生団体[2)]と連携を図ることにした。それは，日頃から学内外で留学生や外国人児童生徒の支援活動に関わっているTICCと連携することで，ボランティア活動でありながらも，留学生と日本人学生両者の立場に立った学生主体の積極的な支援が可能になると考えたためである。

本稿では，2011年秋学期（以下，2011秋）から2012年春学期（2012春）までの１年間にわたり試行錯誤を繰り返しながら実施されたチューター活動について，活動そのものが有効だったか，学生団体と教員で連携がうまくなされていたかについて，参加者から提出された報告書と

参加者へのアンケート結果をもとにその効果を検討する。

2．チューター制度に関する改善策と問題点

国立大学などで採用されている外国人留学生のためのチューター制度について，木暮（2010）によると，チューター制度の運用は実施する大学に任されており，実際にはあまり順調に機能していないことが指摘されている。その問題点は，１）チューター業務の内容を明確に規定されていないこと，２）チューターとして適切な日本人学生が配置されていないことの２点に集約される。そして，チューター制度の改善に向けた主な対策として，１）オリエンテーションの実施，２）チューターマニュアルの作成，３）活動報告書の義務的な提出と担当教職員のチューター活動の管理の３点が報告されてきた。

しかし，上記３点を改善策として実施しても，チューター活動を円滑に進められない問題点が指摘されている。小林（2007）の報告で指摘されている問題点は，１）時間が合わない，２）チューターからの報告書の提出がない，３）専門的な質問にチューターが対応できないという３点である。園田（2008）でも，１）活動が活発に行われているペアもあれば，あまり活動が行われないまま終わってしまうペアもあること，２）開始段階や活動途中の段階で困難を感じて留学生相談室を訪れるチューターや留学生がいることが挙げられている。

本稿で述べられるボランティア・チューター活動は，これらの改善策を採用し，起こり得る問題点を最小限に止めるために様々な実践を実験的に行った。

3．ボランティア・チューター制度の概要

3.1　概要

試行されたボランティア・チューター制度は，宮副ウォン他（2003）で紹介されている「カンバセーション・パートナー・プログラム[3)]」を参考にしている。制度の名称は TICC 学生らが考案した「TOMODACHI Study Support（TSS)」とし，目的は留学生（主に別科生）とボランティア学生[4)]との交流の促進，留学生が学習・生活面などについて気軽に相談できる継続的な支援の提供とした。

活動期間は学期中で，学期ごとに募集とグループのマッチングを行う。これは，より多くの学生に交流の機会を提供するためと，活動期間が短いほうがマッチングへの不満に対処しやすいと考えたためである。チューター活動に参加する留学生とボランティア学生は，学期開始直後の募集期間中に申込をした者を対象としたが，留学生については学期途中からでも活動への参加を可能とした。これは留学生が支援の必要性を感じた時に参加してもらう，留学生の自主性を尊重するためである。従って，ボランティア学生の中には申込をしても支援する留学生がいないため待機状態という場合もある。活動単位は，留学生とボランティア１対１のペアから１対２，２対２などのグループまで，申込人数や留学生の日本語力，申込時の希望，空き時間などを考慮し，１対１のペアに拘らない。

ボランティア学生と留学生は学期中継続して毎週学内で会うこと，１回の活動ごとにボランティア学生は報告書をメールで提出すること，の２点を義務付けた。活動内容の中心は日本語支援で，日本語会話の練習相手，宿題やレポートなどのチェック，日本語能力試験対策など個別のニーズに合わせて対応することとした。また，ボランティアであること，パートナーは希望通りにならない可能性があること，宿題は手伝うだけで代わりにしないことを注意事項として申込用紙（巻末資料１参照）[5)]に明記し，活動開始時の顔合わせ（説明会）でも説明した。

表１は，ボランティア・チューター制度と従来のチューター制度（本学で採用している制度）を比較したものである。従来の制度とボランティア制度で大きく異なる点は，支援対象者の拡大と募集期間の延長である。これにより，より多くの留学生に日本語チューターの機会を与えることができ，ボランティア制度が従来の制度とは異なる役割を果たし得ると考えられる。

表１　２つの制度の比較

	ボランティア・チューター制度	従来のチューター制度
①　チューター	学部生	大学院生
②　支援対象者	別科生，学部生，研究生など	学部生（２年次まで）
③　活動形態	ペア，グループ	ペア
④　活動頻度	週１回	必要に応じて適宜
⑤　支援内容	日本語，日常生活	大学教育，日本語，日常生活
⑥　報告書の提出	週１回	月１回
⑦　募集時期	ボランティア学生：学期開始時 留学生：随時受付	学期開始時

3.2　TICC と教員の連携

ボランティア・チューター制度は，学生団体 TICC との連携で実施されている。図１は，組織図と各役割における仕事や活動を表したものである。活動全体の調整と連携をリーダー（TICC 学生）と教員で行う。その下にアドバイザーを配置する。アドバイザーは TICC 所属の学生が担当し，複数のグループ（ペアを含む）を管理する。その役割は，活動開始時のマッチング，顔合わせの設定，週１回の報告書の回収とフィードバックなどである。また，月２回程度の報告会を開催し，報告書に記載されている相談や問題に対処する役割も担う。アドバイザーの存在は，参加者が継続して活動しやすくするための対策とも言える。グループ数（参加人数）が増えた場合はアドバイザーも増員し，アドバイザーが担当するグループ数は固定する。また，教員ではなく学生がアドバイザーを担当することにより，ボランティア・チューター制度が学生主体の活動であることが明確になり，参加者も気軽に相談しやすくなると期待したからである。

TICC 学生と教員が連携して行った具体的な活動は，その時期によって３つに分けられる。まず，学期開始直後の募集（別科生・学部留学生とボランティア学生への広報活動，申込用紙の配布：巻末資料１参照），マッチング，説明会（資料の作成，説明）である。次に，チューター活動期間中の，報告書に挙げられた相談や問題点への対応，そして学期終了時のアンケー

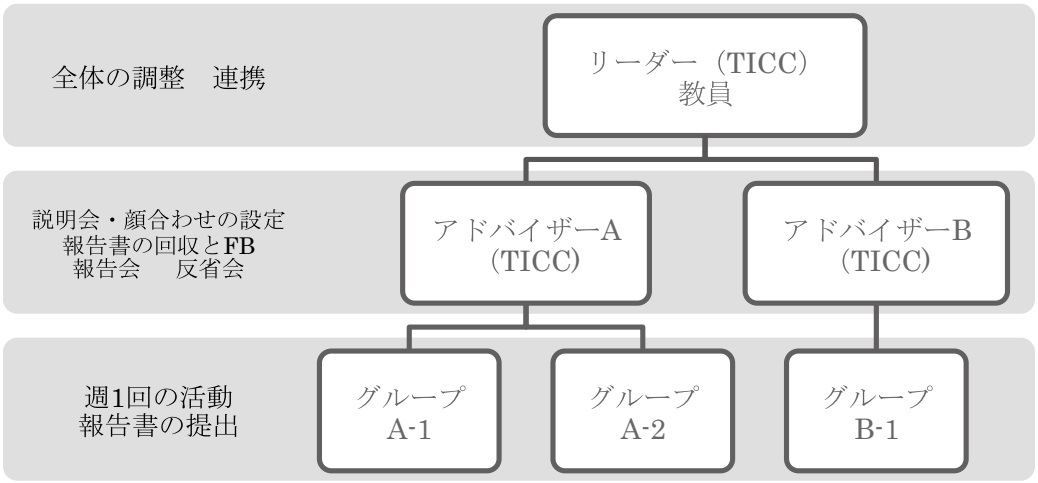

図１　ボランティア・チューター制度の組織図と活動内容

ト実施と反省会（今後の活動への対策）である。

別科生への募集は，2012春からTICC学生が日本語別科研修課程の学期開始時の全体ガイダンスで広報し，教員が各クラスで申込用紙を配布した。学部留学生への広報や申込用紙の配布は教員が担当した。申込の促進や申込用紙の回収を教員とTICC学生が協力して行った。学期期間中も留学生からの申込を教員が窓口になって随時受け付けた。

マッチングは，性格や空き時間の不一致によるグループ解消が回避されるよう注意を払いながら行った。大学が採用しているチューター制度は，チューターである大学院生の専門と学部留学生の在籍学部などを考慮しできるだけ共通の専門を持つ学生同士でマッチングが行われているが，本稿で取り上げるボランティア・チューター制度では専門性を要求する必要がないため，申込者の性格や学習言語レベル，希望や空き時間などによってマッチングが行われる。しかし，申込紙面上だけでは不明な情報（申込者当人ではなく第三者から見た申込者の性格や行動に対する評価）を，TICC学生と教員が連携することで補足した。申込者は，TICC所属の学生や日本語教育法副専攻履修者[6)]が多数を占めていたため，マッチングに関わったTICC学生と教員に知り合いの学生が多い。宮副ウォン他（2003），渡辺他（2004）で紹介されている「カンバセーション・パートナー・プログラム」を主宰している中部大学日本語教育センターの上田氏との私信のやりとりに，マッチングで重要な項目の一つに「申込に来たボランティア学生の印象」があり，経験上それはペア解消の回避に役立つとあった。つまり，上田氏は申込時に直接ボランティア学生に会うことでその学生の印象を記録し，マッチングの材料に生かしているのである。本活動のマッチングでも実験的にその手法を採用した。

木暮（2010）がまとめたチューター制度改善に向けた３つの対策のうち，１）オリエンテーションの実施，２）チューターマニュアルの作成の２点を，2011秋の反省に基づき2012春の活動で採用した。チューターマニュアルに当たる資料には，１）ボランティアとしての姿勢，２）活動に関する注意事項，３）報告書の書き方と提出方法，４）活動を継続するためのコ

ツ，５）よくある質問の５点を記載した。１）と５）を教員が，残りをTICC学生が担当した。１）はボランティアとしてどう留学生と関わったら良いか戸惑う学生のために御舘他（2010）を参考に，４）と５）は2011秋の実態を参考に，内容をまとめた。

3.3　参加人数

参加人数と活動グループ数は，2011秋は109人（留学生61人，ボランティア学生48人）で40グループ，2012春は111人（留学生61人，ボランティア学生50人）で30グループだった。１グループの人数は２～５人である。留学生とボランティア学生の参加人数を図２に示す。

両学期ともに留学生数，ボランティア学生数はほぼ同数であった。別科生の参加率は2011秋が全体の32%，2012春が52%だった。2012春の参加率が上がった理由は，申込用紙に英語訳を併記したこと，学期開始時の別科全体ガイダンスで広報し，各クラスで申込用紙を配布したことが影響していると考えられる。参加率は上昇しているものの，参加した別科生の日本語力には偏りがある。2011秋は初級レベルから36%，初中級から22%，中級から25%，上級から16%と別科全般にわたって参加していたが，2012秋は中・上級の学生が７割以上を占め，初級レベルの学生の参加は少なかった。

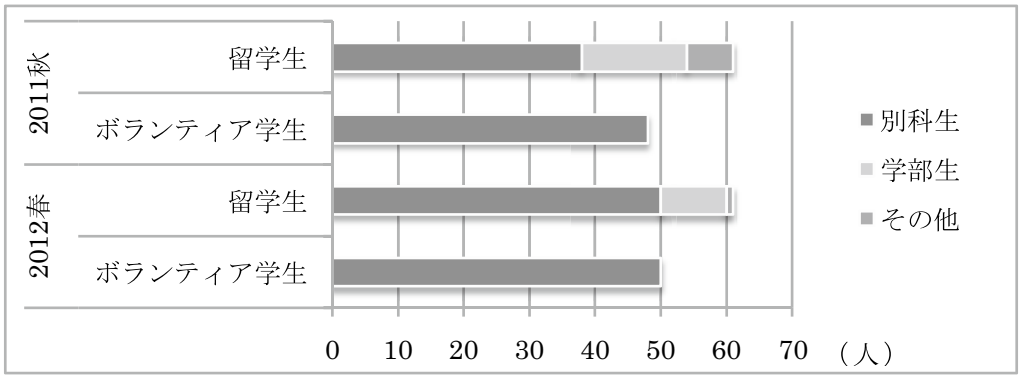

図２　留学生・ボランティア学生の参加人数　（凡例は留学生の内訳）

４．活動内容　―報告書の内容から―

ボランティア学生は週１回の活動ごとにアドバイザーに報告書（巻末資料２参照）を提出している。報告書は，ボランティア学生が記入しやすいように，チェック項目欄を自由記述欄より多めに設けた。ボランティア学生は，少なくともチェック項目欄には記入し提出している。

報告書の提出率は，2011秋が77%で一人当たり平均3.5枚，2012春が58%で一人当たり平均3.6枚，両学期とも最大で８枚だった。3.5～６枚とは約ひと月分に当たる。活動期間が約二カ月半あることから考えると決して高い提出率とは言えない。しかし，報告書の活動回数を見ると，提出は４枚目でも活動は６回目のように，活動は継続されて行われているグループがほと

んどであった。学期末に実施したアンケートで，報告書の提出頻度について質問したところ，提出率が高かった2011秋は７割の学生が「丁度いい」と感じているが，提出率が低かった2012春は反対に７割の学生が「週１回は多い」と感じていた。

それでは，各グループは具体的にどのような活動をしているのだろうか。2012春に提出された報告書に記載されている活動内容をまとめると，「会話」「日本語学習」「宿題のサポート」の３つに集約される。

表２は具体的な活動内容とその件数をまとめたものである。何らかのテーマについて話す「会話」が最も多く報告されている。「会話」というよりも「おしゃべり」に近い雑談の内容も見られるが，中にはボランティア学生がテーマを事前に決め関連資料を準備しているケースもあった。また，「会話だけではつまらないだろうと思って（報告書記載）」書道をしたり，留学生が旅行する場所について一緒に予習したりしているグループもある。「日本語学習」の内容は多岐にわたる。活動当初は「会話」が多かったが徐々に「日本語学習」に移行しているグループもある。「宿題のサポート」は上記２件に比べて少ない。「宿題は手伝うだけで代わりにしてあげないこと」を活動開始時に留学生，ボランティア学生に対して注意を促していたことが功を奏したと思われる。

表２　報告された活動内容

活動内容	件数	下位カテゴリー（件数）	具体例
会話	73	各国事情の情報交換（26）	食べ物，習慣，恋愛観，スポーツ，アルバイト
		日本文化（18）	若者言葉，昔話，俗語，就職活動，アニメ
		自己紹介（９）	趣味，好きなこと
		情報提供（６）	観光地，遊び場，美術館までの行き方
		活動内容（５）	今後の活動について相談，ふりかえり
		近況報告（５）	ゴールデンウィークの過ごし方
		その他（４）	書道，心理テスト
日本語学習	30	文法の復習（８）	助詞，接続詞，初級文型
		原稿のチェック（４）	自己紹介文，スピーチコンテストの文，発表原稿
		テストの答え合わせ（３），教科書の復習（３），漢字の練習（３） 日本語能力試験対策（３），ことわざ（２）	
		口頭発表練習（２）	面接，授業での発表
		その他（２）	学習したアンケートを使った質問，短文作成
宿題のサポート	18	レポートのチェック（８），宿題プリントの手伝い（６） インタビュー／アンケートへの回答（４）	

５．アンケート結果と考察

学期終了時に留学生とボランティア学生にボランティア・チューター活動についてのアンケートを実施した。その回答のうち，本活動の効果を検討するため，ボランティア学生と留学生の学びと問題点，困難時の解決方法，活動人数についてまとめ，以下考察を加える。アンケー

トの回収率は，2011秋が留学生28%，ボランティア学生48%，2012春が留学生44%，ボランティア学生48%であった[7)]。

本活動についての全体的評価は図３の通りである。アンケートに回答した留学生，ボランティア学生の８割以上が，とても良かった，良かったと感じている。

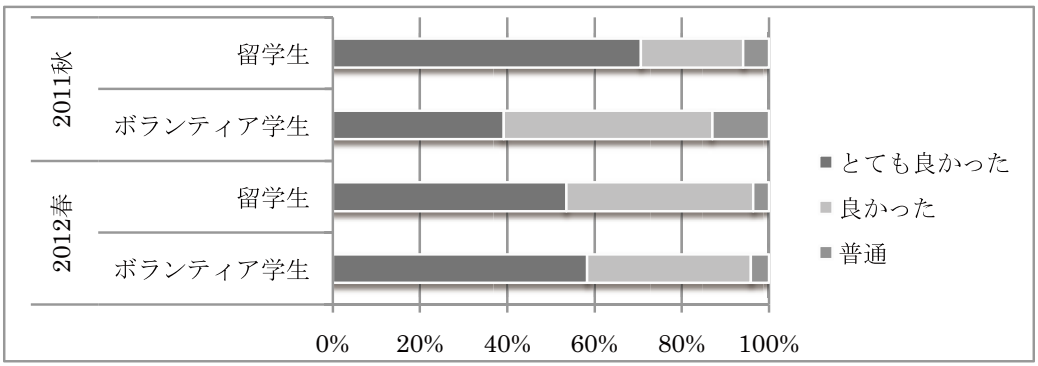

図３　ボランティア・チューター活動の全体的評価

5.1　ボランティア学生と留学生の学びと問題点

ここでは，園田（2008）で作成されたカテゴリーを用いて，ボランティア学生と留学生各々の学びと問題点について述べる。園田は，学部留学生と大学院留学生を対象にしたチューター制度について報告している。チューター活動後に実施した留学生と日本人チューターへのアンケートの自由記述の中から，まとまった語彙や短文で表現できる抽象化できるカテゴリーを作成し，両者の学びと問題点について分析している。

5.1.1　ボランティア学生の学びと問題点

①活動を通して学んだこと

ボランティア学生の自由記述に見られた学びを表３にまとめた。今回のアンケートでは，園田（2008）の「学びのカテゴリー」の中の「共通性を見つける」「他国への興味の伸長」に該当する回答は見られなかった。一方で，「８．日本語教育の実践」が新たに追加された。追加されたカテゴリーは，本活動への参加者に日本語教育を学んでいる学生が含まれていることに起因すると思われる。

＜具体的な記述＞

・相手の国について自分が知らなかったことが学べた。（１.他国事情を知る）

・留学生の疑問や困っていることを知ることができた。（２.差異を見つける）

・外国人から見た日本を客観的な視点で知ることができた。（４.日本文化への客観的視点）

・日本語の難しさや日本語の間違いを知り，自身の日本語理解につながった。

（５.日本語の再考・再学習）

・質問されることで一緒に調べた。（6.自己の学習）
・留学生の学ぶ姿勢や意欲の高さが刺激になった。（7.自己成長）

表3　ボランティア学生の学び

学びのカテゴリー	2011秋	2012春	計
1．他国事情を知る	4	9	13
2．差異を見つける（文化差・個人差）	1	1	2
3．友情の成立	6	3	9
4．日本文化への客観的視点	0	2	2
5．日本語の再考・再学習	5	6	11
6．自己の学習（学習スキル・外国語）	2	0	2
7．自己成長（視野の拡大・自己発見）	0	3	3
8．日本語教育の実践	4	2	6

ボランティア学生は，留学生との交流を通して様々な学びを得ていることがわかる。最も件数が多いのは園田（2008）同様，「他国の事情を知る」である。報告書からも「お互いの国を知ると自分の世界も広がるとわかった」「お互いの国の違いを話すのはとても面白い」などのコメントが見られる。次いで多いのは「日本語の再考・再学習」である。日本語能力試験対策や文法の説明をした際の報告書に「簡単な言葉ほど難しいことに気付いた」「助詞の使い方が難しい」というコメントがあったが，ここからも活動がボランティア学生の日本語を客観的に捉え直す機会になっていることがわかる。

②活動における困難点

表4はボランティア学生が感じている問題点をまとめたものである。園田（2008）の「問題点のカテゴリー」の中の「意思のすれ違い」「手助けできることがない」「自分の専門知識の少なさ」に該当する回答は見られなかった。「自分の専門知識の少なさ」に該当する回答が見られなかったのは，園田で報告されているチューター制度は，学部留学生と大学院留学生を対象にしたもので，本活動とはその役割が異なるためであると思われる。つまり，本活動では日本語のみの学習をしている別科留学生を主な対象にしているため，大学で学ぶ専門知識についての質問は留学生から出にくかったということである。しかし，日本や日本語について上手く説明できないことをもどかしく感じているボランティア学生は多い。対策として日本語教育法を学んでいるボランティア学生とそうでない学生をグループに組むなどの工夫が必要だろう。

本アンケートの回答結果から，新たに追加された「6.活動内容の決定力不足」は報告書からも窺える。「一体どんな話題がいいのか分からない。今は会って，その日の流れのままに話しているが，これで留学生Aさんはいいのか？　次回もう一度希望を聞いて活動していきたい」と自分の活動内容に疑問を持ちながら試行錯誤している様子が見られる。また，「他のグループはこんなことしています！などの情報が欲しい」という要望もあった。2011秋では活動期間中に，他のグループの活動事例をメールで情報共有したが，2012春はそれをしなかった。

2012春の活動開始時に配布した資料に過去（2011秋）の活動事例を記載していたため，必要ないと判断したからである。しかし，それだけでなく随時報告される活動事例からユニークなものや参考になりそうなものを取り上げ情報更新し，各グループの活動を充実させることも重要である。

「説明ができない，説明力が不足している」と同位の「時間調整の難しさ」は，小林（2007）でも指摘されている問題点である。2011秋の実践から活動が円滑に行われているグループに共通して見られた点がある。それは，毎週同じ曜日・同じ時間に会っているということだった。この点は改善策の一つとして「活動日時の固定」が今後参加者に提示できるだろう。

表４　ボランティア学生の感じる問題点

問題点のカテゴリー	2011秋	2012春	計
1．日本語を教えるのが難しい	1	3	4
2．説明ができない，説明力が不足している	6	5	11
3．時間調整の難しさ	6	5	11
4．（留学生の日本語力に起因する）対応[8)]の難しさ	5	2	7
5．人間関係（開始，継続）の難しさ	1	0	1
6．活動内容の決定力不足	1	2	3
7．その他	1	1	2

＜具体的な記述＞

・日本のことを聞かれて答えられなかった。（2.説明ができない）
・グループ内のレベル差が大きく何を教えたらいいかわからなかった。（4.対応の難しさ）
・何をしたらいいかわからず，学習のアイデアに困ることがあった。（6.活動内容の決定力不足）
・留学生の学習意欲にばらつきがあった。（7.その他）

5.1.2　留学生の学びと問題点

次に留学生がボランティア・チューター活動の意義や困難点をどのように捉えているかについてまとめる。

表５に示した留学生の感じるメリットは，「学習・研究の手助け」以外は園田（2008）と共通している。これは，前節で述べたように，本活動の主な支援対象が別科留学生のため，学部・大学院留学生と異なり日本語以外の学習や研究を助ける必要性が低いことが影響していると思われる。留学生は本活動の意義を主に日本語の支援と友情の成立だと捉えている。この結果は，別科生の以前からの要望，「会話の相手になってほしい」「日本人と友達になる機会があまりない」に本活動が応えることができていると考えていいだろう。

一方で，留学生が感じる問題点（表６）は，「意思のすれ違い」と「活動内容の決定力不足」が追加される[9)]。前者は「もっと積極的に教えてほしい」「文法の使い方をもっと知りたかった」などの自由記述によるものである。これは，ボランティア学生が，「日本語を教える

のが難しい」「説明力不足」を問題だと感じている点に重なる。つまり，ボランティア学生が日本語を教えたいと思ってもその説明力に欠けるため，留学生に対して説明不十分で消極的な印象を与えてしまうと考えられる。留学生が「時間調整の難しさ」や「活動内容の決定力不足」を問題だと捉えていることもボランティア学生に共通する。

表５　留学生の感じるメリット

メリットのカテゴリー	2011秋	2012春	計
1．日本語力の向上・日本語会話の機会提供	9	11	20
2．日本文化，習慣への理解促進	0	3	3
3．友情の成立	3	14	17
4．生活情報，大学情報の提供	1	0	1

表６　留学生の感じる問題点

問題点のカテゴリー	2011秋	2012春	計
1．（自身の日本語力の不足による）コミュニケーションの難しさ	2	6	8
2．時間調整の難しさ	2	8	10
3．意思のすれ違い	2	2	4
4．活動内容の決定力不足	0	2	2

5.2　困難時の解決法

本活動の特徴の一つに学生アドバイザーの配置があるが，アドバイザーはその役割を十分に果たしていただろうか。アンケートの回答から，ボランティア学生は，活動中に困難に直面した際，教員やアドバイザーに相談したり本やインターネットなどで情報収集したりして解決していたことがわかった。

2011秋の活動期間中，ボランティア学生からアドバイザーに，どのような活動をしたらいいかわからないという相談が報告書を通して多数寄せられた。そこで，アドバイザーは報告会でボランティア学生の相談について対策を話し合った。その結果，筆者は他グループの活動事例やそれ以外の活動案（日本語教育の視点から考えられるもの）をまとめ，それをアドバイザーからボランティア学生全員にメールで送ることにした。その後，数人のボランティア学生から，送られてきた活動事例を参考に活動内容を決定したという報告があった。これは，アドバイザーによる各グループの管理が，ボランティア学生の悩みに迅速に対応できた事例である。他にも，活動開始時の顔合わせの日程調整や活動期間中のグループ解消の回避など，随所でその役割を果たしている。

アンケート回答者のうち実際にアドバイザーに相談したボランティア学生は35％だったが，アドバイザーの必要性を感じているボランティア学生は65％に上った。その主な理由に，問題が起こった際に役に立つ・気軽に相談できる，管理する人がいないと継続しにくい，留学生の間に入ってくれる第三者が必要という意見があった。ボランティア学生にとって，アドバイザーの存在そのものが安心感をもたらし，安定的な活動に繋がっている様子が窺われる。また，

アドバイザー自身が責任を持ちその役割を果たすことで，教員との連携が円滑になされているとも言えるだろう。

5.3　活動人数

大学が採用しているチューター制度はチューターと留学生１対１のペアで支援が行われているが，本活動では申込人数や留学生の日本語力，申込時の希望，空き時間などを考慮し，ペアに拘らず，３人以上のグループでも活動した。この形態を参加者はどのように捉えているだろうか。

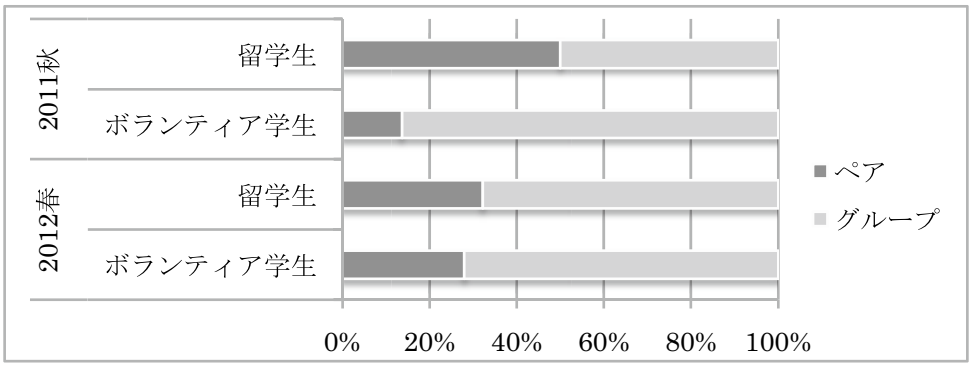

図４　活動人数の希望

図４は，ボランティア学生と留学生それぞれに，ペアとグループのどちらで活動するのが効果的かを尋ねた結果である。グループ単位での活動を望む声がペアでの活動より多い結果となった。

グループ単位のほうがいい理由には，話が絶えず支援しやすい，様々な意見が聞けるので面白いなどの意見があった。ペアがいい理由には，留学生一人一人のニーズが異なるためグループだと煩雑になり活動しにくいという意見があった。グループ単位の活動を希望する学生が多かったが，グループで活動しているボランティア学生が「留学生の日本語力に差が大きいこと」や「留学生の学習意欲に差があること」を困難点だと感じていることを忘れてはならない。活動の継続を促進させるためにも参加者の要望を考慮したマッチングや，活動状況に応じて活動人数を調整する必要がある[10)]。

６．まとめと課題

本稿では，１年間にわたり試行されたボランティア・チューター活動について，活動が有効だったか，学生団体と教員で連携がうまくなされていたか，参加者から提出された報告書と参加者へのアンケート結果をもとにその効果を検討した。

留学生，ボランティア学生ともに活動に対する全体的評価は高く，有意義なものであった。

ボランティア学生は留学生との交流を通して異文化を理解し日本語を再考する機会を得ていた。また留学生も日本語の支援やボランティア学生との間に友情が生まれることに意義を見出している。一方で問題点も明らかになった。ボランティア学生は自身の説明力不足，留学生は日本語力不足によるコミュニケーションの難しさに困難を感じていた。両者は，視点は異なるが互いに影響して生じている，コミュニケーションの成立に関わる問題点だと言える。

さらに，今回の活動は学生団体と教員が連携を図ることで様々な効果をもたらした。効率的に広報活動し参加者を集めることができた点，活動期間中に起こった問題への迅速な対処，連携することで責任感が生まれアドバイザーの存在が活動継続を促進していた点などである。

別科生には交換留学生も多い。留学生活におけるボランティア学生との心温まる豊かな交流が，次に来日する他の留学生にプラスの影響を与えることも考えられる。今後は，活動内容の充実を図るため，ボランティア学生同士で情報交換をする場を設けたり，留学生と一緒に活動内容を考えていく機会を提案したりすることも重要である。また，コミュニケーションのとり方に困難を感じた際，どのような方略があるかアドバイスする機会も必要だろう。さらに見落としている問題点を探り，より良い活動を構築していきたい。ボランティア・チューター活動での経験が，将来の多文化社会を担う学生たちへの糧として位置づけられれば活動の意義は大きいと思われる。

注

1）ペアの内訳は，春学期が大学院生30名（複数担当者３名含む），留学生33名，秋学期が大学院生５名，留学生５名である。

2）東海大学に「チャレンジセンター」という機関が設置されている。これは，学部学科を横断する多様な学生たちが集い，社会貢献性の高いプロジェクトの支援を推進する教育機関である。TICC は本センターの「チャレンジプロジェクト」に所属する学生団体である。「チャレンジプロジェクト」とは，学生主体で自由な企画を立案し，大学職員によるプロジェクトコーディネーター，教員によるプロジェクトアドバイザーの支援を受けながら年間を通じた活動を実施するものである。複数学科に横断してメンバーが構成されていること，参加人数が50名以上であることなどを応募条件としている。（チャレンジセンター「2011年度活動報告書」より）筆者はアドバイザーとして TICC に関わっている。

3）「カンバセーション・パートナー・プログラム」は，中部大学日本語教育センターで実施されている日本人学生ボランティアによる日本語学習支援活動である。センターで日本語を学んでいる留学生全員を対象に行われている。ボランティア学生は，週１回留学生と会って会話をした後，簡単なレポートを教員に提出する。

4）チューターとして活動する学生は，日本人だけでなく学部留学生も含まれるため，「ボランティア学生」とする。

5）留学生用の申込用紙は，ボランティア学生とほぼ同様で英語訳が併記されている。

6）日本語教育法副専攻は，筆者が所属する国際教育センターが開講している授業プログラムである。

7）アンケートは活動終了時に行われたパーティで実施され，欠席者にはメールで配布・回収を行った。

8）園田（2008）では，「会話の難しさ」としているが，本稿の場合は会話だけでなく，グループ内での日本語力の差にどう対応したらいいか困ったという意見もあったため，会話ではなく「対

応」とした。

9）園田（2008）にある留学生の「問題点のカテゴリー」のうちの「専門分野のずれ」「友情の不成立」に該当する回答は見られなかった。

10）2012春の申込用紙には，どの形態で活動したいかグループ人数を記入する欄を設けている。巻末資料１参照。

引用文献

御舘久里恵・千田武司・中河和子・吉田聖子・米勢治子（2010）『外国人と対話しよう！　にほんごボランティア手帖』凡人社

木暮律子（2010）「自立学習能力の育成を目指したチューター活動とチューター支援方法に関する実践的研究」科学研究費補助金研究成果報告書

小林浩明（2007）「チューター制度の改善と留学生アドバイジング」『北九州市立大学国際論集』５，pp. 53-62

園田智子（2008）「チューター活動における日本人学生と留学生の異文化間理解―チューター活動実施後のアンケートの自由記述分析から―」『群馬大学留学生センター論集』８，pp. 1-12

宮副ウォン裕子・上田美紀・渡辺民江（2003）「カンバセーション・パートナー・プログラムの参加者は何を学びあったか―中部大学生と香港理工大学生の双方向的学習の調査と分析―」『留学生教育』８，pp. 201-220

渡辺民江・上田美紀・宮副ウォン裕子（2004）「カンバセーション・パートナー活動の効果と問題点―留学生，教員を対象とした活動評価の調査から―」『留学生教育』９，pp. 157-167

＜資料１＞　ボランティア学生への申込用紙　2012春版

☆ Tomodachi Study Support ☆

こんにちは。わたしたちは、東海大学チャレンジセンター「Tokai International Communication Club(TICC)」の学生です。東海大学の留学生へ日本語支援活動を行うため、2011年秋学期から「TOMODACHI Study Support(TSS)」という活動を始めました。今学期からも活動を行っていきますので、是非、ご協力ください。

＊内容＊

日本人学生が別科、学部、大学院などの留学生のチューターになり、週に一度学内で会って日本語支援をする。日本語の会話練習相手、宿題やレポートのチェック、能力試験対策等、個人のニーズに合わせて対応する。

＊春学期スケジュール＊

4月5日(木)～16(月)　募集期間
4月20日(金)　合同説明会＆顔合わせ　（場所：８－409　時間：17：00～）
4月23日(月)　支援スタート
7月13日(金)　支援終了・最終報告会＆パーティー

＊注意事項＊　※参加学生には以下の規約に同意してもらいます。

・パートナーは希望通りにならない可能性があります。
・必ず週に一度、学内で会うこと
・欠席の場合は必ず、相手に連絡すること
・春学期中、活動を継続すること
・ボランティアであること
・宿題は手伝うだけで、代わりにやらないこと

＊活動報告書＊

日本人学生は一回の支援終了ごとに、活動報告書を記入してもらいます。指定のwordファイルに記入し、専用メールアドレス（説明会でお知らせします）に送信してください。

＊その他＊

登録者は週一回の日本語支援の他にも、国際教育センターの「日本語教育ボランティア」にも参加することができます。このボランティアでは、別科の授業内でのお手伝いをお願いします。時間割の空き時間をふまえて、合致する人に国際教育センターの担当者から連絡がありますので、参加を希望する方は申込用紙に記入をお願いします。

申込用紙

ふりがな 名前		国籍	
学部学科学年	学部　　学科　　年	性別	男 ・ 女
住所	都・県　　市・郡・区　　町		
連絡先 分かりやすく書いてください	電話		
	メール		
今までに履修した日本語教育法副専攻科目(○をつけてください)	日本語教育考法概論・現代日本語文法・日本語音声学・日本語語彙論・日本語教育方法論 日本語教育演習・接触場面演習・日本語授業研究・日本文化概論・言語の諸相１/３/４ 日本語と社会心理２・日本語と教育１/３		
日本語を教えた経験	期間・相手など具体的に記入してください		
英語以外の学習言語	期間やレベルなど具体的に記入してください		
海外経験	場所や期間、目的など		
趣味			
性格			
ﾊﾟｰﾄﾅｰの希望			
ｸﾞﾙｰﾌﾟの希望人数	□ボランティア学生１人：留学生１人 □ボランティア学生１人：留学生２人 □ボランティア学生２人：留学生２人		
今学期の授業の空き時間	確実に空いている時間を記入してください		
４限後に支援できる曜日	確実に空いている日に○をつけてください 月 ・ 火 ・ 水 ・ 木 ・ 金 ・ 土		
日本語教育ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ	参加する　・　参加しない		
４月23日の説明会	参加できる　・　参加できない		
来られない場合説明希望日時	月　日　時～ / 月　日　時～		

提出場所　８号館２階のチャレンジセンター推進室
　　１５号館５階のＴＳＳメールボックス
提出期限　2012年４月16日17：00

東海大学チャレンジセンターInternational Communication Club

＜資料２＞　報告書用紙　2012春版

＊2012春学期支援活動報告書＊

皆さんお疲れさまです。TSS はこの報告書をもとに、今後の活動をより良いものにしていきたいと考えています。ご記入にご協力よろしくお願いします。

アドバイザー名		グループ番号	
学部・学科		氏名	
パートナーの 名前と国名			
支援日	第　回　月　日（）　：　～　：		
今日のテーマ			
総合評価	５・４・３・２・１　　理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿		
学習内容	□会話　□文法　□漢字の勉強　□宿題・教科書の手伝い □その他（　　） 具体的な内容：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿		
計画の達成度	□計画通りにできた □半分くらい計画通りにできた □計画通りにできなかった 理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿		
良かった事・気づいた事・自身が学んだ事・次回に活かしたい事など			
困ったこと・自分一人で解決が困難な問題など			